

<原著>

夫婦間葛藤への巻き込まれと家族システムの関連 —役割逆転に注目して—

後藤夏妃 信州大学大学院総合人文社会科学研究科
水口 崇 信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では、夫婦間葛藤を家族システムの視点から検討した。具体的には、巻き込まれと親子の役割逆転の関連、役割逆転が生じている家族の特徴を検証した。大学生 210 名（男性 83 名，女性 126 名，その他 1 名）を対象に、夫婦間葛藤認知尺度，役割逆転尺度，家族機能尺度の全 51 項目を用いた。分析の結果、「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」が巻き込まれに影響を与えていること，役割逆転のパターンと巻き込まれ得点の関連，役割逆転と家族の凝集性・適応性の関連が明らかになった。

キーワード：家族間葛藤，役割逆転，家族の凝集性，巻き込まれ

はじめに

家族は子どもが生まれて初めて出会い所属する集団である。子どもが家族の中で経験した様々な出来事が，その後のパーソナリティや人生に大きく影響することは言うまでもない。増田・山中・武井・平川・志村・古賀・鄭（2004）は，家族が子どもに対して担う役割について「身体的にも精神的にも未熟な状態で生まれてきた子どもを成熟させる役割がある」と述べており，家庭環境が子どもの小・中学校での学校適応やその後の対人関係・社会適応に影響を与えることを示した。他にも，家族が子どもの成長に与える影響については多くの研究がされており，家族全体の状態や両親の関係が子どもの精神的健康と関連することが指摘されている（松野・野末，2015；鈴山・徳田，2009）。

家族関係の中でも，夫婦の関係は家族全体の土台を為すものである。これまでの研究で，夫婦間の愛情関係やコミュニケーションは夫婦それぞれの精神的健康や心理的適応に影響を与えることが示唆されている（伊藤・池田・川浦，1999；小田切・菅原・北村・菅原・小泉・八木下，2003）。さらに夫婦関係の影響は夫婦 2 人にとどまらない。菅原・八木下・託摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）や鈴山・徳田（2009）は夫婦間の愛情が子どもの抑うつや特性不安の低減に繋がることを示している。また，夫婦間での愛情度が高いほど家庭の雰囲気は居心地の良いものとなり家族のまとまりも強くなる傾向にあることを指摘

しており、良好な夫婦関係が家族ひいては子どもの健康にとって重要な要素であることを指摘している。

夫婦間葛藤とその影響

良好な夫婦関係が良好な家族関係に寄与するということは、葛藤を抱えた夫婦関係は家族関係に不安定さや葛藤をもたらすと言える。特に子どもは両親の不和を「自分のせい」と思い込みやすいため心理的負担も大きいとされている(中釜・野末・布柴・無藤, 2021)。両親の夫婦間葛藤による子どもへの影響についての研究は欧米を中心に盛んであり、これまでに、夫婦間葛藤の深刻さと反社会的・攻撃的な問題行動などの外在化型問題および引きこもりや抑うつといった内在化型問題との関連が一貫して示されている(Cummings, Davis & Campbell, 2002)。日本では、前島・小口(2001)が小学生を対象にした研究で、子どもが認知した両親の不和が母子関係・父子関係の認知を媒介して子どもの攻撃性や自尊心に影響を及ぼしていることを明らかにした。さらに、本多・小林・桜井(2002)は青年期の子どもが両親の夫婦間葛藤を脅威に感じていると他者に対する不信感や警戒心が強まることを示している他、夫婦間葛藤の解決不全や葛藤に対する自己非難が自己への信頼感を低下させることを示唆している。このように、子どもの発達段階に関わらず夫婦間葛藤はパーソナリティや社会適応など子どもの様々な側面に影響を及ぼしている。2004年に児童虐待防止法が改正され、配偶者に対する暴力(Domestic Violence: DV)の場面を子どもに目撃させることが新たに心理的虐待として位置づけられた。このような制度の改正や社会の関心・理解の変容により、夫婦間葛藤の程度によっては「面前DV」として虐待と捉えられるようになってきている。実際、2021年度に警察が通告した心理的虐待80304件のうち約6割が面前DVであり、通告児童数は約46000人に上る(警察庁, 2022)。夫婦間葛藤は単なる「夫婦喧嘩」ではとどまらない家庭内の重要な問題として取り上げる必要があると考えられる。

夫婦間葛藤の子どもへの影響を検討したこれまでの研究から、夫婦間葛藤そのものについての両親の評価よりも、子どもが両親の夫婦間葛藤をどう感じてどう捉えたかという子どもの認知と情緒面がその後の子どもの適応に影響を与えることが明らかになっている(Davies & Cummings, 1994; Mann & Gilliom, 2002; 鈴山・徳田, 2009)。夫婦間葛藤の影響を理解するには葛藤そのものの性質や子どもの認知的・情緒的体験、さらには家族機能や親の養育態度など様々な側面から検討することが望まれるだろう。

巻き込まれ

夫婦間葛藤に対する子どもの認知を測定する尺度(Children's Perception of Interparental Conflict Scale)を開発したGrych and Fincham(1992)は「葛藤の深刻さ」「恐れ」「自己非難」の3因子を抽出したが、その過程で、「私の母は父との口論の際、私に味方になってもらいたがる」といった夫婦間葛藤への巻き込まれを測定する「三角関係」の因子を削除した。しかしAmato and Afifi(2006)は、「三角関係」の類似概念であ

る「板挟み感 (feelings of being caught between parents)」について、主観的幸福感や親子関係の質の低さとの関連を示している。さらに日本でも、家族システムの視点に注目した川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤 (2008) が Grych et al. (1992) の尺度では削除された「三角関係」に新たな項目を加えた「巻き込まれ感」尺度を作成し、夫婦間葛藤が深刻であるほど子どもの「巻き込まれ感」が高まり、恐れと自己非難を媒介して抑うつと関連することを示している。また山本・伊藤 (2012) は巻き込まれについて、親が子どもを取り合う「三角関係型の巻き込まれ」と親子の境界が曖昧になった「境界不全型の巻き込まれ」の2つの次元を想定し大学生を対象に調査を行った。その結果、「境界不全型の巻き込まれ」が青年期の適応問題と関連していることが示された他、葛藤の激しさが巻き込まれを高めるという川島ら (2008) と同様の結果が得られた。両親の離婚を経験した18~29歳を対象に離婚後の親の行動と子どもの心理的苦痛・適応の関連を調査した直原・安藤 (2020) は、「母による父の悪口に対するネガティブ感情」が「子どもらしさの棄却」と関連することを明らかにした。このように、夫婦間葛藤において親が子どもを自分の味方につけようとすることや配偶者の悪口を子どもに聞かせることといった子どもの巻き込まれは、夫婦間葛藤による子どもへの影響を考える上で重要な要素であると考えられる。Davis et al. (2002) が作成した尺度を基に夫婦間葛藤による子どもの情緒的安定性を測定する尺度の日本語版を作成した廣瀬・濱口 (2021) は、その中の「巻き込まれ表象」の因子が子どもの適応問題と強く関連していることを示し、子どもの適応を保つためには子どもの巻き込まれを低減することが大切であると論じている。しかしながら国内では、夫婦間葛藤への子どもの巻き込まれに関する実証的な研究は極めて少なく、巻き込まれを高める要因は深刻さや激しさといった夫婦間葛藤の質がどうであるかという視点にとどまっている。そこで本研究では、夫婦間葛藤の質以外の視点から巻き込まれを高める要因について検討していく。なお本研究における巻き込まれは山本・伊藤 (2012) の研究で用いられた「境界不全型の巻き込まれ」を指し、「本来夫婦間で解決すべき情緒的問題が、サブシステムである子どもにまで流れ込み、親子関係が融合した境界不全による巻き込まれ (山本・伊藤, 2012)」と定義する。

家族システムの歪み

夫婦が自分たちの葛藤に子どもを巻き込む現象は家族システムの視点から捉えることができる。家族療法家の Bowen は三角関係という概念を生み出し、緊張状態にある二者は第三者を巻き込むことで緊張を緩和しようとすることを提唱した (Kerr & Bowen, 1988/2001)。また、Minuchin (1974/1984) は、家族内を区切る境界について、親子間のような世代間の境界が曖昧になっている家族は家族成員それぞれの役割が不明確で、互いが互いを巻き込んだ混乱状態になりやすいとしており、親が責任を果たすべき問題に子どもが巻き込まれる状態について言及している。「境界不全型の巻き込まれ」を見出した山本・伊藤 (2012) も、境界不全や三角関係といった家族システムの機能不全が子どもの巻

き込まれを生じさせる可能性を示唆していることから、家族がシステムとしてどのような状態であるかは子どもの巻き込まれを高める一因となり得ると予測した。本研究では家族システムに着目し、親子関係の状態と家族全体の状態から巻き込まれを高める要因について検討する。三角関係のような親子の境界が曖昧になり親の問題に子どもが巻き込まれている状態は「役割逆転 (role reversal)」の視点からも理解できる。これは加藤 (2001) によれば親が子どもに甘え、子どもが親の心の世話をすることとされ、情緒的サポートやケアにおいて親と子の役割が逆転している現象である (山田・平石・渡邊, 2016)。この現象も、親子の境界が曖昧になっているために親が自分の問題に子どもを巻き込み、問題の解決を子どもに委ねている現象と言えよう。この役割逆転について、これまで詳細な定義が定まっておらず実証的研究も少ない。山田・平石・渡邊 (2015) は国内外における役割逆転の研究から概念整理を行い、(1) 親が子どもに情緒的サポートを与えない、(2) 子どもの側が親に情緒的サポートを与える、(3) 親は子どもに過剰な期待を課す、(4) 親は子どもに「すねる」「ふてくされる」などの屈折的甘えを呈する、の4点を役割逆転の特徴として抽出し、それらを役割逆転の定義として設定した。役割逆転による子どもへの影響としては、過剰適応傾向や他者に対する情緒依存性などを特徴とする疑似成熟の問題 (加藤, 2001; 山田ら, 2015) が指摘されているほか、罪悪感との関連が挙げられている (山田ら, 2016)。また、役割逆転の一側面である「甘え」に着目した山田 (2022) は子どもの心理的ストレス反応との関連を検討し、役割が逆転した親子関係が子どもの精神的健康をネガティブな方向に作用させる可能性を示した。役割逆転はそれ単独でも子どもに影響を及ぼすが、夫婦間葛藤と絡み合うことで、夫婦間葛藤時に親が子どもに配偶者の愚痴を聞いてもらおうとすることや、傷ついた心を子どもに慰めてもらおうとすることといった巻き込みを助長すると考えられる。

役割逆転は子どもにとって不適応的であるとする研究が多い一方で、青年期における役割逆転はむしろ適応的であるとする研究もわずかに見られる。Walsh, Shulman, Bar-On and Tsur (2006) は、15~18歳の青年を対象とした研究で、役割逆転が家族にとってコーピングとして働くことを明らかにしており、ストレスフルな出来事に対する、家族システムの適応的な反応と言うこともできる。また日本でも、子どもが大学生の時期になると親子の関係は親が子を頼りにする関係へと変化し、子どもが適応的に親の役割を担うようになることが指摘されている (落合・佐藤, 1996; 森川, 2016)。

家族機能との関連

役割逆転は親子関係の問題であるものの、家族システムが行うコーピングの1つと捉えればその背景にある家族機能についても検討する必要があると考えられる。加藤 (2001) は役割逆転が生じやすい家族として「家族、家族の一点張りの家族」という表現で挙げており、家族に固執する家族は子どもに「親の傷を癒す役割」を強いることになることと論じている。また境界の概念を提唱した Minuchin (1974/1984) は、親の問題に子どもが巻き込

まれるような曖昧な境界の家族を「纏綿家族 (enmeshed family)」と呼び、家族がお互いに精神的に依存し合う共依存の関係に陥りやすいことを示している。このように、一見家族成員同士の結びつきが強く、家族がまとまっていたとしても、その結びつきが極端な場合には役割逆転が生じやすい状態にあると考えられる。この極端な家族の結びつきに警鐘を鳴らしたのが Olson, McCubbin, Larsen and Wilson (1985) である。Olson et al. (1985) は家族システムの機能度を測るために「凝集性 (Cohesion)」と「適応性 (Adaptability)」という2つの次元で構成された尺度 (Family Adaptability and Cohesion Scale III) を作成した。凝集性は家族成員間の情緒的な結びつきを表し、適応性は状況や問題に応じて家族成員の役割関係などを柔軟に変化させる能力を表す(草田, 1995)。Olson et al. (1985) はこれら2つの次元の値がどちらも中程度を示す「バランス群」には家族機能が最もよく働く家族が位置し、どちらも極端に高いまたは低い値を示す「極端群」には機能不全の問題のある家族が位置するとし、このモデルを円環モデルと呼んだ。実際、Minuchin (1974/1984) も家族の境界が曖昧な境界でもなく、家族関係が乖離した固い境界でもない、ほどよく親と子の間で情報が共有されほどよく線引きがされた明瞭な境界の家族が最も健康的であるとしていることから、家族システムが健康的に機能している家族はその構造や機能が両極端ではなくバランスのとれたほどよい形であることがうかがえる。一方で、日本では円環モデルに反して凝集性の高い家族は肯定的に評価されることが多く(西出・夏野, 1997)、野口(2009)の研究でも家族の結びつきが強すぎることで家族に否定的な影響を及ぼすという結果は示されなかった。このことから、家族の結びつきが極端に強いというだけでは役割逆転のような親子関係の歪みが生じるとは言い難い。家族の結びつきが強固なものであっても、状況によって親が親の役割を果たし子どもが子どもの役割を果たせるような適応性が高く柔軟な家族では役割逆転は生じにくいのではないだろうか。

家族の適応性については、「柔軟性 (Flexibility)」という同義の概念として家族レジリエンスの要因の1つにも挙げられており、家族が危機的状況に陥った際、規則・役割の再構築や強いリーダーシップにより対処し回復していく力とされている(大山・野末, 2013; Walsh, 1998)。また、石森・藤澤・小杉・清水・渡邊・藤澤(2008)は家族システムの適応性には親の果たす役割が大きく関わっていることを示している。これらを踏まえると、適応性は家族内で生じる問題に応じて親がリーダーシップという親役割を果たすことや本来の家族構造を変化させることで問題に立ち向かう力を表し、適応性が低い家族は親の代わりに子どもが問題解決に奔走することや、問題に対して柔軟に対処できないことで家族関係に歪みが生じる可能性が考えられる。凝集性が高くとも適応性が低い家族は、親子間の強固な情緒的つながりと曖昧な境界を維持したまま問題に対処しようとするために、本来親が対処すべき問題に子どもが巻き込まれる役割逆転が生じると推測される。

本研究の目的

以上から、夫婦間葛藤における子どもの巻き込まれは、役割逆転により境界が曖昧にな

った親子関係によって助長されることがうかがえる。また、親子の役割逆転が生じている家族は家族の凝集性と適応性の高さに特徴的な様相を呈することが推測される。そこで本研究では役割逆転が夫婦間葛藤への巻き込まれの認知に及ぼす影響を検討し、役割逆転のどのような側面が巻き込まれと関連するのか明らかにすることを第一の目的とする。さらに役割逆転と家族機能の関連について検討することで、役割逆転が生じている家族の特徴について明らかにすることを第二の目的とする。先行研究から想定される仮説は次の通りである。(1) 役割逆転は巻き込まれを高める要因となる、(2) 役割逆転が生じている家族は、家族の凝集性は高いが適応性は低い。

方法

調査対象と手続き

2022年10月中旬から下旬にかけて、A県内の大学・大学院に所属する大学生及び大学生を対象に質問紙調査を実施した。授業終了後に質問紙を配布しその場で回答を求め、回答した質問紙は授業終了後の退出時に回収した。

回収された216名分の質問紙のうち、9割以上回答できていた210名（男性83名、女性126名、その他1名；平均年齢20.25歳、 $SD=0.97$ 歳）を分析対象とした。

倫理的配慮

質問紙配布にあたって調査の目的を紙面及び口頭で伝え、回答は任意であり回答の有無や内容は成績に無関係であること、途中で回答をやめなくなった場合には回答を中断しても構わないことを説明した。加えて、回答したデータは統計的に処理され、個人が特定されないことや本研究以外の目的に使用されることはないことを紙面に記載した。また、本調査は公益社団法人日本心理学会が定める倫理規定に遵守して行った。なお本研究で用いた質問項目は夫婦間葛藤や役割逆転といったネガティブ且つセンシティブな内容をたずねるものであり、現在の家族への影響を考慮する必要があると考えたため、現在ではなく小学生～高校生の頃の出来事についてたずねる形式をとった。

質問紙の構成

対象者に関する質問項目 年齢、性別について尋ねた。

家族機能測定尺度 家族機能について測定するために草田・岡堂（1993）が作成した日本語版家族機能測定尺度を使用した。「凝集性」「適応性」の下位尺度からなる20項目で構成される。

役割逆転尺度 親子関係の役割の逆転について測定するために山田・平石・渡邊（2015）が作成した親子関係の役割逆転尺度を使用した。「親の過期待」「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」「子どもによる情緒的サポート」の下位尺度からなる16項目で構成される。山田ら（2015）によれば、役割逆転は「母子関係と父子関係の両方で生起し得る現象」と捉えられており、本研究でも双方から役割逆転を検討することが望ましいと考え

られるが、その場合、合計項目数が 67 となり回答者への負担過多となってしまう。そこで、回答者の負担軽減とひとり親家庭の学生に対する配慮から、対象とする親は「母親」「父親」と限定せず、「親または保護者のうち、あなたと普段最も関わりのあった人を 1 人思い浮かべ、その人に当てはまるものに○をつけてください。」という教示文と「母親・父親・その他」の選択肢を与え回答を求めた。その上で、「『最も関わりのあった親』との関係で、以下の項目のそれぞれについてどれだけ当てはまっていたと思いますか。該当するもの 1 つに○をつけてください。」という教示文を提示した。教示文作成においては山田 (2022) の役割逆転尺度作成の研究を参考にした。

夫婦間葛藤尺度 山本・伊藤 (2012) によって作成された、夫婦間葛藤に対する子どもの認知を測定する尺度である。夫婦間葛藤に対する子どもの認知について、親側にその要因がある「葛藤の激しさ」「葛藤の持続性」「葛藤の解決」からなる 20 項目と子側にその要因がある「恐れ・身体反応」「巻き込まれ」からなる 14 項目で構成されており、信頼性と妥当性が確認されている。本研究では親側の要因から「葛藤の激しさ (項目例：両親が争うのは日常的風景だ)」、子側の要因から「巻き込まれ (項目例：両親は、私に相手の悪口や不満を言う)」を測定する項目を使用した。この尺度は子どもが経験した両親の夫婦間葛藤について尋ねるものであるため、「あなたが小学生～高校生だった頃、両親の夫婦間葛藤 (夫婦げんか) を経験したことはありますか」という質問を設け、「ある」「ない」を選択してもらい、「ある」を選択した者にのみ回答を求めた。

尺度項目の回答形式はいずれも「非常にあてはまる (5 点)」「ややあてはまる (4 点)」「どちらともいえない (3 点)」「あまりあてはまらない (2 点)」「全くあてはまらない (1 点)」の 5 件法であった。尺度項目はいずれも回答者が小学生～高校生だった頃について問うことを目的としたため、教示文に「あなたが小学生～高校生だった頃の」という文言を追加し、全ての項目を過去形にすることで過去の出来事に対する回答者の認知を尋ねた。本研究とそれに即した教示文の時制の改訂は、心理学を専攻する大学院生 5 名と協議の上で実施した。さらに、14 名の大学生・大学院生に教示文を読ませて、文法及び表現上の不備がないことを確認した。

結果

各変数の記述統計と相関分析

はじめに各変数の平均値、標準偏差を確認した後、各変数間の関係を確認するため性別、家族機能、役割逆転、夫婦間葛藤、各々の下位尺度間の相関係数を算出した (表 1)。なお性別に関しては数値化処理 (男性=1, 女性=2, その他=3) を行い分析に用いた。表中の尺度名について、「親の過期待」は「過期待」, 「親の屈折的甘え」は「屈折的甘え」, 「親から子へのサポート放棄」は「サポート放棄」, 「子どもによる情緒的サポート」は「情緒的サポート」と省略して記述した。

表1 記述統計と相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	N	M	SD
1. 性別	—									210	—	—
2. 凝集性	.05	—								210	3.71	0.74
3. 適応性	.06	.67 ^{***}	—							210	3.18	0.56
4. 役割逆転全体	.01	.25 ^{***}	.32 ^{***}	—						210	2.53	0.73
5. 過期待	.09	.10	.17 [*]	.83 ^{***}	—					210	2.69	1.28
6. 屈折的甘え	.05	.24 ^{***}	.36 ^{***}	.84 ^{***}	.56 ^{***}	—				210	2.24	1.19
7. サポート放棄	.04	.54 ^{***}	.45 ^{***}	.53 ^{***}	.28 ^{***}	.49 ^{***}	—			210	1.75	0.73
8. 情緒的サポート	.10	.09	.04	.50 ^{***}	.29 ^{***}	.21 ^{***}	.12 ⁺	—		210	3.44	0.94
9. 激しさ	.03	.44 ^{***}	.46 ^{***}	.37 ^{***}	.15 ⁺	.40 ^{***}	.40 ^{***}	.11	—	131	2.71	0.98
10. 巻き込まれ	.04	.32 ^{***}	.26 ^{***}	.46 ^{***}	.25 ^{***}	.48 ^{***}	.40 ^{***}	.19 [*]	.69 ^{***}	131	2.90	1.00

^{***} $p < .01$, ^{*} $p < .05$, ⁺ $p < .10$

相関分析の結果、性別と各下位尺度の間に有意な相関は認められなかった。家族機能の2つの下位尺度について、役割逆転と夫婦間葛藤の各下位尺度との相関係数を算出したところ、「凝集性」に関しては「役割逆転全体」「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」「激しさ」「巻き込まれ」との間で弱～強い程度の負の相関が示され ($r = -.24 \sim -.54$)、「適応性」では「役割逆転全体」「親の過期待」「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」「激しさ」「巻き込まれ」との間で弱～中程度の負の相関が示された ($r = -.17 \sim -.46$)。また、役割逆転の各下位尺度と夫婦間葛藤の各下位尺度との相関係数を算出したところ、「役割逆転全体」「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」と「激しさ」の間で中程度の正の相関 ($r = .37 \sim .40$)、「役割逆転全体」「親の過期待」「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」「子どもによる情緒的サポート」と「巻き込まれ」の間で弱～中程度の正の相関が示された ($r = .19 \sim .48$)。

性差の検討

家族関係に関する研究では性差について言及されることが多い(例えば宇都宮, 1999など)ため、家族機能、役割逆転、夫婦間葛藤の各下位尺度について Welch の方法による t 検定を行った(表2)。分析の結果、どの下位尺度においても性差は認められなかった。

表2 各下位尺度における性差の検討

	N		M		SD		t	d	p
	男性	女性	男性	女性	男性	女性			
凝集性			3.76	3.67	0.69	0.77	0.86	0.12	.392
適応性			3.22	3.15	0.54	0.58	0.88	0.12	.379
過期待	83	126	2.55	2.79	1.23	1.31	-1.34	-0.19	.181
屈折的甘え			2.15	2.31	1.03	1.28	-0.97	-0.13	.333
サポート放棄			1.78	1.74	0.64	0.78	0.42	0.06	.674
情緒的サポート			3.56	3.36	0.88	0.98	1.54	0.21	.124
激しさ	47	84	2.75	2.69	0.85	1.05	0.35	0.06	.728
巻き込まれ			2.85	2.93	0.90	1.05	-0.45	-0.08	.652

注)効果量はd値で算出した。

役割逆転尺度と巻き込まれの関連の検討

役割逆転と巻き込まれの関連を検討するため、役割逆転の各下位尺度得点を説明変数、巻き込まれ感の尺度得点を目的変数とした重回帰分析を行った(表3)。分析の結果、決定係数は有意であり ($R^2 = .29$, $F(4,126) = 12.58$, $p < .001$)、標準偏回帰係数は「屈折的甘え」「サポート放棄」が1%水準で有意であった。

表3 「巻き込まれ」を目的変数とする重回帰分析の結果

	巻き込まれ
親の過期待	-.06
親の屈折的甘え	.35 **
親から子へのサポート放棄	.25 **
子どもによる情緒的サポート	.15 +
重決定係数 (R^2)	.29 **

** $p < .01$, + $p < .10$

次に、役割逆転が葛藤の「激しさ」とは異なる「巻き込まれを高める要因」となり得るか検討するため階層的重回帰分析を行った(表4)。Step1では「激しさ」単独での影響を確認するため「激しさ」のみを投入し、Step2では「激しさ」と「役割逆転」尺度を投入、Step3ではそれらの交互作用を投入した。分析の結果、Step1において「激しさ」と「巻き込まれ」の関連が有意であった ($\beta = .69$, $p < .001$)。またStep2においては「激しさ」「役割逆転」共に「巻き込まれ」との関連が有意であり(「激しさ」: $\beta = .60$, $p < .001$, 「役割逆転」: $\beta = .25$, $p < .001$)、決定係数の増加分も有意であった ($\Delta R^2 = .05$, $p < .001$)。Step3については決定係数の増加分は有意ではなく ($\Delta R^2 = .00$, $p = .923$)、交互作用項も有意ではなかった ($\beta = -.01$, $p = .923$)。

表4 「激しさ」「役割逆転」と「巻き込まれ」の関連

	Step1	Step2	Step3
	β	β	β
激しさ	.69 **	.60 **	.60 **
役割逆転		.25 **	.25 **
激しさ×役割逆転			-.01
R^2	.48 **	.53 **	.53 **
ΔR^2		.05 **	.00

** $p < .01$

役割逆転のパターンによる分類

役割逆転尺度を作成した山田ら（2015）は、この尺度を用いて実証的研究を行う際には各成分の線形的関係の検討に終始せず、役割逆転の4つの側面を統合した上で検証を行うことが必要不可欠であると指摘している。そのため、本研究においても相関分析や重回帰分析といった線形的関係の検討だけでは捉えきれない役割逆転と巻き込まれの関連を検討するため、役割逆転の下位尺度得点を用いた Ward 法による階層的クラスタ分析を行った（図1、表5）。各クラスタの意味の解釈の容易さを考慮し5クラスタを得た。第1クラスタは全ての下位尺度得点が全体平均を上回った。そのためこのクラスタに分類された人は親子間で双方に役割逆転が生じていると考えられる。よって第1クラスタを「親子逆転群」と命名した。第2クラスタは「親の過期待」のみが全体平均を大きく上回っているがその他の得点は全体平均に近い値である。このクラスタに分類された人は、親が親役割を果たしているという点で役割逆転は生じていないが、親としての子どもへの期待が過剰であるという特徴が考えられる。よって第2クラスタを「過剰期待群」と命名した。第3クラスタは「子どもによる情緒的サポート」のみが高得点でその他の得点は平均を下回っている。そのため、このクラスタに分類された人は親との関係が互恵的であり、円滑な関係が築けていると判断し山田ら（2015）に倣い「親子円滑群」と命名した。第4クラスタは全ての下位尺度得点において全体平均を下回った。そのためこのクラスタに分類された人は親子間で役割逆転が生じていないと考えられる。加藤（2001）によれば役割逆転が生じている親子の親は精神的に未成熟であるとされていることから、山田ら（2016）はこのようなクラスタに分類された人の親は精神的に成熟した親であると判断している。本研究でも先行研究に倣い第4クラスタを「親成熟群」と命名した。第5クラスタは「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」において平均を上回り、その他の得点では平均を下回っている。そのためこのクラスタに分類された人は、第1クラスタと同様に役割逆転は生じているが、親子間双方の逆転ではなく、親からの一方的な逆転が生じていると考えられる。よって第5クラスタを「親逆転群」と命名した。

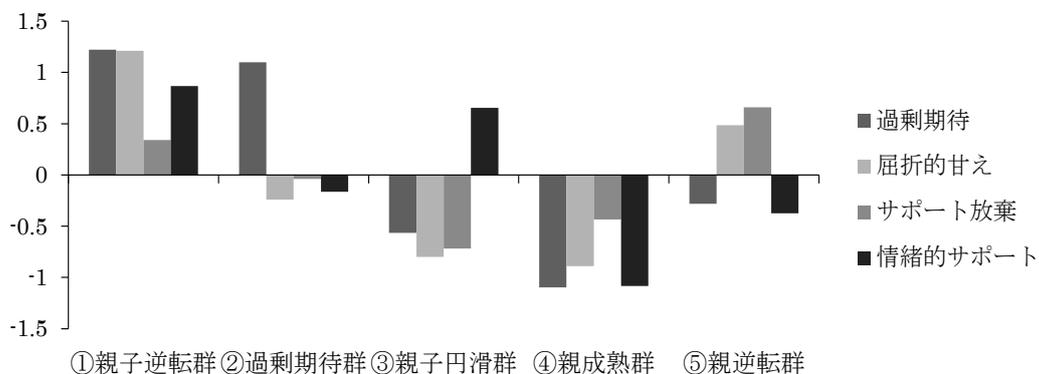


図1 クラスタ分析の結果（縦軸は標準化得点）

表5 各クラスタにおける記述統計量と分散分析の結果

変数	M (SE)					F値	partial η^2	Holm
	①親子逆転群 n = 42	②過剰期待群 n = 29	③親子円滑群 n = 46	④親成熟群 n = 38	⑤親逆転群 n = 55			
過期待	4.25(0.09)	4.09(0.11)	1.97(0.09)	1.29(0.10)	2.33(0.08)	178.85 ***	.78	④ < ③ < ⑤ < ①, ②
屈折的甘え	3.68(0.11)	1.96(0.13)	1.29(0.10)	1.18(0.12)	2.82(0.10)	94.70 ***	.65	③, ④ < ② < ⑤ < ①
サポート放棄	2.00(0.10)	1.72(0.12)	1.23(0.09)	1.43(0.10)	2.23(0.08)	20.53 ***	.29	③, ④ < ①, ⑤; ③ < ② < ⑤
情緒的サポート	4.26(0.10)	3.28(0.12)	4.05(0.10)	2.42(0.11)	3.09(0.09)	51.071 ***	.50	④ < ②, ⑤ < ①, ③

有意水準; *** $p < .001$

注) 分散分析の自由度はF(4, 205), 多重比較は全て $p < .01$ 。

役割逆転のパターンと巻き込まれの関連

役割逆転のパターンと巻き込まれの関連を検討するため、各クラスタを独立変数とした一要因分散分析を行った(表6, 図2)。分析の結果、各クラスタの差は有意であった($F(4, 126) = 6.52, p < .001, MSe = 0.85, \eta^2 = .17$)。Holmの方法による多重比較の結果、「親子逆転群」の得点が「過剰期待群」「親子円滑群」「親成熟群」よりも有意に高く(「過剰期待群」; $adjusted\ p = .035, d = 0.80$, 「親子円滑群」; $adjusted\ p = .001, d = 1.09$, 「親成熟群」; $adjusted\ p = .001, d = 1.12$), 「親逆転群」の得点が「親成熟群」よりも優位に高かった($adjusted\ p = .042, d = 0.76$)。

表6 巻き込まれを目的変数とする分散分析結果

巻き込まれ	①親子逆転群 n = 30	②過剰期待群 n = 22	③親子円滑群 n = 24	④親成熟群 n = 21	⑤親逆転群 n = 34	F値	partial η^2	Holm
M	3.49	2.74	2.47	2.40	3.11	6.52***	.17	②, ③, ④ < ① ④ < ⑤
SE	0.18	0.2	0.19	0.2	0.16			

有意水準; *** $p < .001$

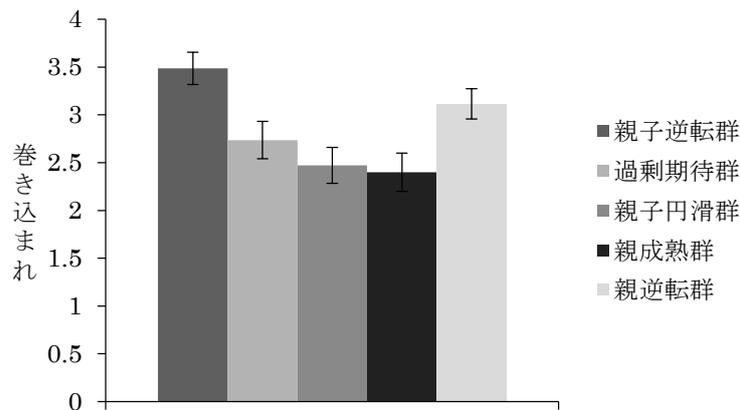


図2 巻き込まれを目的変数とする分散分析結果

役割逆転による巻き込まれへの影響の検討

役割逆転の下位尺度のうち、「巻き込まれ」に有意な正の影響が見られた「屈折的甘え」「サポート放棄」について、葛藤の「激しさ」とは異なる「巻き込まれを高める要因」となり得るか検討するため階層的重回帰分析を行った。なお、多重共線性の問題を回避するために、「激しさ」と「屈折的甘え」「サポート放棄」の得点は中心化したものをを用いた。Step 1では「激しさ」単独での影響を確認するため「激しさ」のみを投入し、Step 2では「激しさ」と役割逆転尺度の下位尺度を投入、Step 3ではそれらの交互作用を投入した。結果を以下に示す。

「屈折的甘え」 分析の結果、Step 1において「激しさ」と「巻き込まれ」の関連が有意であった ($\beta = .69, p < .001$)。また Step 2においては「激しさ」「親の屈折的甘え」共に「巻き込まれ」との関連が有意であり（「激しさ」： $\beta = .59, p < .001$ 、「親の屈折的甘え」： $\beta = .25, p < .001$ ），決定係数の増加分も有意であった ($\Delta R^2 = .05, p < .001$)。Step 3については決定係数の増加分は有意ではなく ($\Delta R^2 = .00, p = .719$)，交互作用項も有意ではなかった ($\beta = -.02, p = .719$)。結果を表 7 に示す。

表 7 「巻き込まれ」における「激しさ」と「親の屈折的甘え」の関連

	Step1	Step2	Step3
	β	β	β
激しさ	.69 **	.59 **	.59 **
屈折的甘え		.25 **	.25 **
激しさ×屈折的甘え			-.02
R^2	.48 **	.53 **	.53 **
ΔR^2		.05 **	.00

** $p < .01$

「サポート放棄」 分析の結果、Step 2において「激しさ」「親から子へのサポート放棄」共に「巻き込まれ」との関連が有意であり（「激しさ」： $\beta = .63, p < .001$ 、「親から子へのサポート放棄」： $\beta = .15, p = .031$ ），決定係数の増加分は5%水準で有意であった ($\Delta R^2 = .02, p = .031$)。Step 3については決定係数の増加分は有意ではなく ($\Delta R^2 = .00, p = .545$)，交互作用項も有意ではなかった ($\beta = -.04, p = .545$)。結果を表 8 に示す。

表8 「巻き込まれ」における「激しさ」と「親から子へのサポート放棄」の関連

	Step1	Step2	Step3
	β	β	β
激しさ	.69 **	.63 **	.62 **
サポート放棄		.15 *	.17 *
激しさ×サポート放棄			-.04
R^2	.48 **	.49 **	.47 **
ΔR^2		.02 *	.00

** $p < .01$, * $p < .05$

役割逆転のパターンと家族機能の関連

役割逆転の各パターンにおける家族機能について、「凝集性」「適応性」の高低にどのような特徴が見られるか検討するため、各クラスタを独立変数、家族機能の各下位尺度を目的変数とする一要因分散分析を行った。結果を以下に示す（表9、図3, 4）。

表9 家族機能下位尺度における記述統計量と分散分析結果

変数	$M (SE)$					F 値	partial η^2	Holm
	①親子逆転群 $n = 42$	②過剰期待群 $n = 29$	③親子円滑群 $n = 46$	④親成熟群 $n = 38$	⑤親逆転群 $n = 55$			
凝集性	3.66(0.11)	3.73(0.13)	3.92(0.11)	3.84(0.12)	3.46(0.10)	2.90 *	0.05	⑤ < ③
適応性	3.08(0.08)	3.16(0.10)	3.30(0.08)	3.39(0.09)	3.01(0.07)	3.68 **	0.07	⑤ < ④

有意水準；* $p < .05$, ** $p < .01$

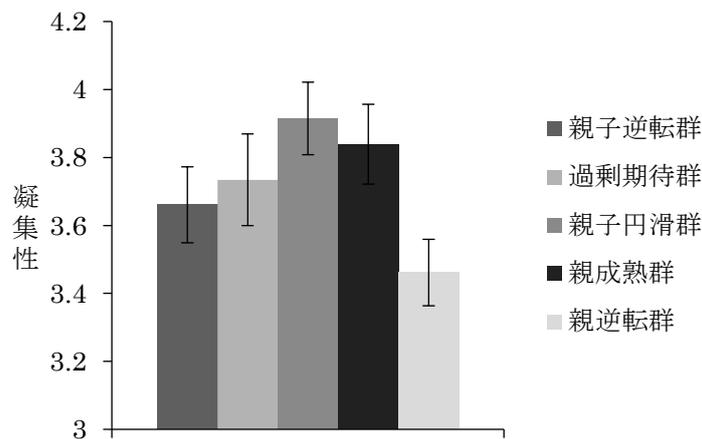


図3 凝集性を目的変数とする分散分析結果

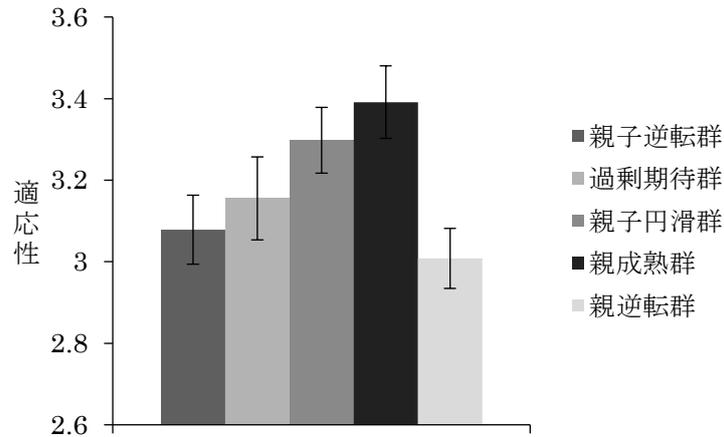


図4 適応性を目的変数とする分散分析結果

「凝集性」 分析の結果、各クラスターの得点の差は有意であった ($F(4, 205) = 2.90, p = .023, MSe = 0.53, \eta^2 = .05$)。Holmの方法による多重比較の結果、「親子円滑群」の得点が「親逆転群」より有意に高かった ($adjusted\ p = .020, d = 0.62$)。

「適応性」 分析の結果、各クラスターの得点の差は有意であった ($F(4, 205) = 3.68, p = .006, MSe = 0.30, \eta^2 = .07$)。Holmの方法による多重比較の結果、「親成熟群」の得点が「親逆転群」より有意に高かった ($adjusted\ p = .011, d = 0.69$)。

考察

本研究の目的は、親子の役割逆転と夫婦間葛藤における子どもの「巻き込まれ」の関連を検討すること、そして、役割逆転が生じやすい家族の特徴について検討することであった。仮説は次の通りであった。(1) 役割逆転は「巻き込まれ」を高める要因となる (2) 役割逆転が生じている家族は、家族の凝集性は高いが適応性は低い。

役割逆転と巻き込まれの関連

はじめに本研究の結果に基づき役割逆転と巻き込まれの関連について考察する。役割逆転合計では「巻き込まれ」との間に中程度の相関が見られ、重回帰分析においても重決定係数が有意であり、標準偏回帰係数でも「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」による関連が示された。また、階層的重回帰分析においても葛藤の激しさによる影響を加味した上での役割逆転による影響が示された。分散分析でも「親子逆転群」が「過剰期待群」「親子円滑群」「親成熟群」よりも有意に高得点であり、「親逆転群」が「親成熟群」よりも有意に高得点であった。よって仮説 (1) 役割逆転は「巻き込まれ」を高める要因となるは支持され、境界不全や三角関係などのシステムの機能不全によって子どもが夫婦関係に巻き込まれる可能性があるという山本・伊藤 (2012) の指摘は支持されたと判断される。役割逆転の各特徴と「巻き込まれ」の関連について、相関分析において「親の屈折的甘え」

「親から子へのサポート放棄」と巻き込まれの間には中程度の正の相関がみられた。また、重回帰分析の結果からも役割逆転における「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」が子どもの巻き込まれと関連することが示された他、階層的重回帰分析においても「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」が「激しさ」と独立した要因となることが明らかになった。よって、役割逆転における「親の屈折的甘え」と「親から子へのサポート放棄」の側面が夫婦間葛藤への子どもの巻き込まれを高める要因となることが示されたと言える。

これまでに、巻き込まれが子どもの自己非難や罪悪感と関連することが明らかになっている（川島ら，2008；中釜ら，2008；直原・安藤，2020）が、役割逆転においても罪悪感との関連が示唆されている。しかし本研究で巻き込まれとの関連が示された「親の屈折的甘え」においては罪悪感との関連が示されていない（山田，2016）。また、直原・安藤（2020）の研究では巻き込まれによるネガティブ感情が過剰適応傾向を表す「子どもらしさの棄却」を高めることを示している一方で、山田ら（2015）は役割逆転と過剰適応の関連はあくまで可能性の1つに過ぎないことを指摘し、「親の屈折的甘え」と疑似成熟の間に明確な関連はないという見解を示した。これらを踏まえると、役割逆転は直接的に罪悪感や過剰適応、疑似成熟と関連するというよりも、夫婦間葛藤への巻き込まれを介して子どもの心理的適応と関連している可能性が考えられる。役割逆転という目には見えない親子関係の歪みが夫婦間葛藤への巻き込まれという形で顕在化することで、子どもの心理的適応に影響を与えると推察される。

「屈折的甘え」は「すねる」「ふてくされる」「不機嫌」などの一方的で歪んだ甘えによって相手から賞賛や感謝、配慮を引き出そうとするものである。本来親子間で生じる健康的な「甘え」は、子どもがフラストレーションなどのネガティブ感情に対し、親からの慰めや励ましを得て緩和させるという目的で表出されることが多いとされており（山田，2022），役割逆転が生じている親子間ではこの関係が逆転している。これらのことから、役割逆転における「親の屈折的甘え」の側面は、夫婦間葛藤で傷ついた親が「配偶者の悪口を子どもに聞かせる」「葛藤による不機嫌さを子どもに向ける」という屈折した甘え行動を子どもに向けて表出することで、慰めや配慮、許容といった自らの心のケアを子どもに要求するという巻き込みを生じさせると考えられる。

次に、「親から子へのサポート放棄」が「巻き込まれ」と関連していたことについて、役割逆転には親が子どもに屈折的甘えを呈しケアやサポートを要求しながらも、親が子どもの甘えに応えることはなく子どもの情緒的欲求が満たされることはないという特徴がある（山田，2022）。また相関分析でも「親から子へのサポート放棄」と「親の屈折的甘え」の間には中程度の正の相関があることや、先行研究において役割逆転の諸特徴には連動性や階層性がある可能性が示唆されている（山田，2022）ことから、「親から子へのサポート放棄」は「親の屈折的甘え」と連動することで、親が子どもの気持ちよりも自分の欲求を優

先させるがために屈折的甘えを呈すという役割逆転関係が生じ、夫婦間葛藤における巻き込まれを高めていると解釈できる。以上より、子どもへの影響を考える上で重要であるとされている夫婦間葛藤への巻き込まれに親子関係への介入という視点の重要性が示された。

役割逆転と家族機能の関連

役割逆転と家族機能の関連について、相関分析の結果、役割逆転全体と凝集性・適応性それぞれ間に有意な中程度の負の相関が確認された。各下位尺度においても「親の屈折的甘え」との間にそれぞれ有意な中程度の負の相関、「親から子へのサポート放棄」との間にそれぞれ有意な強い負の相関が確認された。分散分析の結果、凝集性については「親逆転群」が「親子円滑群」より有意に得点が低く、適応性については「親逆転群」が「親成熟群」よりも有意に得点が低かった。しかし親子双方の役割が逆転している「親子逆転群」においては凝集性・適応性共に他群との有意な差は認められなかった。以上より、仮説(2) 役割逆転が生じている家族は、家族の凝集性は高いが適応性は低い、について、「親逆転群」においては適応性に限り支持されたと言えるが、「役割逆転が生じている家族は凝集性・適応性共に低い」という解釈はあくまで1つの可能性にとどまると考えられる。「親逆転群」において家族機能の低さが示されたことについて、森川(2015)は、子どもが親から親的役割を期待されていながらその期待に沿った行動をしない場合に家族の凝集性・適応性が低下することを明らかにしている。また、石盛ら(2008)は家族成員間関係と家族システムの機能についての調査から、家族成員間には思いやりの互恵性が成立しており、家族の思いやり関係が強いほど家族の凝集性も高くなることを示した。本研究においても、親子が互恵的にサポートを与え合っているとされる「親子円滑群」が「親逆転群」よりも高い凝集性を示している。このことから、親が親的役割を放棄したまま一方的に子どもに親的役割を要求する子どもからのサポートは得られない「親逆転群」は、親からの屈折的甘えが子どもによって満たされず、且つ子どもが親に求める情緒的サポートが親によって満たされることはないといった両者の役割期待への裏切りが家族機能の低下に繋がっていると考えられる。「親子円滑群」において凝集性の高さが示されたことは、役割逆転が家族にとって適応的に働くという先行研究(落合・佐藤, 1996; 森川, 2016)の見解とも一致している。また、「親成熟群」と適応性の高さの関連についても、石盛ら(2008)が指摘した家族の適応性に対する親の役割の重要性を支持するものである。家庭内での役割として、夫婦は互いが互いの情緒的サポートを担う役割があるとされていることや、夫婦の愛情関係が強いほど家族のまとまりも強くなるというこれまでの見解(小田切ら, 2003; 中釜ら, 2008; 鈴山・徳田, 2009)から、夫婦関係において情緒的サポートの関係が機能していない夫婦のもとでは、家族全体の機能低下や、自分の情緒的サポートを配偶者ではなく子どもに求めざるを得なくなるという家族システム全体の歪みが生じることが推測される。本研究の「役割逆転が生じている家族は凝集性が高い」という仮説が支持されなかった点についても、凝集性が高く家族成員間の結びつきが強い家族は夫婦間で互いの情緒的サポー

トが為されているという背景が考えられる。また、役割逆転のような親子間の強い結びつきが生じることでもう一方の親が排斥された三角関係が形成され、ますます夫婦間での問題解決が困難になると同時に、家族全体の結びつきは弱くなっていくことも推測される(中釜ら, 2008)。以上より、役割逆転は親子間で生じる現象であるものの、家族全体の機能とも密接に関わっていることから、親子関係だけではなく各家族成員間の相互作用まで含んだ包括的なアセスメントと介入が必要であると考えられる。

役割逆転についての考察

本研究で得られた結果から役割逆転という現象の特徴について考察する。本研究ではクラスタ分析により、「親子逆転群」「過剰期待群」「親子円滑群」「親成熟群」「親逆転群」の5群を採用しその後の検討を行った。これまでの研究から、役割逆転のパターンには親子双方において役割が逆転しているパターンと、親からの一方的な役割逆転のパターン、子どもからの一方的な役割逆転のパターンが報告されており、本研究でも3パターン全てを抽出することができた。役割逆転には家族システムの適応的な問題解決方略としての側面と、子どもの精神的健康に負の影響を及ぼすような不適応的な問題解決方略としての側面が考えられるが、本研究の結果を踏まえると「親子逆転群」と「親逆転群」が不適応的な役割逆転であると考えられ、その2パターンに共通する特徴が「親の屈折的甘え」と「親から子へのサポート放棄」である。これらは山田(2022)が役割逆転の親行動として設定した「子どもに甘える親」「子どもの甘え欲求を満たさない親」という下位尺度と符合するものであり、特に屈折的甘えについては、役割逆転における他の側面を生起させる先行要因として作用する可能性も指摘されている。このことから、「親の屈折的甘え」と「親から子へのサポート放棄」は、子どもにネガティブな影響を与える不適応的な役割逆転の中心的な要素として捉えることができ、「役割逆転は親子間で生起する不健全で歪んだ甘えの問題」という山田(2022)の見解は本研究によって支持され得ると考えられる。また本研究において、一部役割逆転が生じていると解釈できる「過剰期待群」「親子円滑群」について不適応的であるという結果が示されなかった背景には、親の自己愛的な甘えである屈折的甘えとそれに伴うサポート放棄が生じておらず、親が親の役割を果たしている上での部分的な役割逆転であったためであると考えられる。特に「親子円滑群」については親子のサポートが互恵的であり、先行研究でも示されている適応的な役割逆転のパターンであると言える。本研究では不適応的な役割逆転のパターンとして「親子逆転群」と「親逆転群」を抽出したが、「親逆転群」についてはこれまでの先行研究では見られなかったパターンである(山田ら, 2015など)。しかし巻き込まれや家族機能の面において「親子逆転群」と「親逆転群」が異なる様相を示したことは、親子双方で生じている役割逆転と親からの一方的な役割逆転を区別して扱う必要性を示唆していると考えられる。

今後の課題

最後に今後の課題について述べる。第一に、因果関係の断定まではできない点である。

本研究では役割逆転が巻き込まれを高めるというモデルを想定し検討を行ったが、家族というシステムでは出来事同士が互いに原因となり結果となる円環的因果律の中で様々な事象が生じている（中釜ら，2008）。そのため、巻き込まれの「発生原因」として役割逆転を据えることは早計であり、あくまで相互に影響し合う事象の中の一部であることは強調される必要があるだろう。

第二に、本研究では家族レベルならびに夫婦・親子レベルに焦点を当て検討を行ったため、家族を構成する個人については言及していない点である。加藤（2001）によれば役割逆転している親は情緒的に未成熟であるとされている他、屈折的甘えの背景には、甘えたいのに甘えられないという自己愛的な欠乏状態があるという指摘もある（稲垣，2007）。また、役割逆転は虐待関係にある親子間で生起しやすいとされながらも、近年では虐待の有無を問わず生じる現象であると報告されている。したがって、役割逆転のさらなる検証には親側の心理的背景や各発達段階における子どもの適応やパーソナリティ、精神的健康といった側面からの検討が重要であると考えられる。

第三に、本研究における家族機能を測定する尺度として円環モデルを想定した FACEIII 日本語版（草田・岡堂，1993）を用いたが、この尺度が現代の日本の家族機能を測定するにあたって妥当なものであるか否かは再度検討する必要がある。現代の日本の家族において凝集性・適応性とはどのような概念でどのレベルが健康的なものであるかを明確にする必要があると考えられる。

付記

本研究は、信州大学大学院総合人文社会科学研究所に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

文献

- Amato, P. R. & Afifi, T. D. (2006). Felling caught between parents: Adults children's relations with parents and subjective Well-being. *Journal of Marriage and Family*, 68, 222-234.
- Cummings, E. M., Davis, P. T., & Campbell, S. B. (2002). *Developmental psychopathology and family process: Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press.
- Davies, P. T. & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, 116, 387-411.
- Davies, P. T., Forman, E. M., Rasi, J. A. & Stevens K. I. (2002). Assessing children's emotional security in the interparental relationship: The security in the interparental subsystem scale. *Child Development*, 73, 544-562.

- Grych, J. H., Michel, S. & Fincham, F. D. (1992). Assessing marital conflict from the child's perspective: The children's perception of interparental conflict scale. *Child Development, 63*, 558-572.
- 廣瀬愛希子・濱口佳和 (2021). 両親関係の情緒的安定性が青年の適応に与える影響—日本語版 SIS の作成を通して— 心理学研究, *92*, 129-139.
- 本多潤子・小林久美・桜井茂男 (2002). 認知された夫婦間葛藤が信頼感の形成に与える影響 日本教育心理学会第44回大会発表集, 203.
- 稲垣実果 (2007). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, *16*, 13-24.
- 石森真徳・藤澤孝志・小杉孝司・清水裕士・渡邊 太・藤澤 等 (2008). 家族システムの構造分析—家族成員間関係と家族全体システムの機能との関連について バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌, *10*, 159-168.
- 伊藤裕子・池田政子・川浦康至 (1999). 既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響 心理学研究, *70*, 17-23.
- 加藤諦三 (2001). 子どもと心の通う親 何故かスレ違う親 株式会社青春出版社.
- 川島亜紀子・真榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, *56*, 353-363.
- 警察庁 (2022). 令和3年における少年非行, 児童虐待及び子供の性被害 警察庁 Retrieved December 8, 2022 from <https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/syonen.html>
- Kerr, M. E. & Bowen, M. (1988). *Family Evaluation*. W W Norton & Company. (カー, M. E. & ボーエン M 藤縄昭・福山和女 (監訳) (2001). 家族評価: ボーエンによる家族探究の旅 金剛出版.
- 草田寿子 (1995). 日本語版 FACESIIIの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, *28*, 154-162.
- Mann, B. J. & Gilliom, L. A. (2002). Emotional security and cognitive mediate the relationship between parents' marital conflict and adjustment in older adolescents. *The Journal of Genetic Psychology, 165*, 250-271.
- 前島芳名子・小口孝司 (2001). 父母の不和が子どもの自尊心, 情緒安定性ならびに攻撃性に及ぼす影響—父は情緒に, 母は行動に— 家族心理学研究, *15*, 45-56.
- 増田彰則・山中隆夫・武井美智子・平川忠敏・志村正子・古賀靖之・鄭 忠和 (2004). 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について 心身医学, *44*, 903-909.
- 松野航大・野末武義 (2015). 大学生における家族コミュニケーションおよび両親の夫婦関係の認知と境界例心性の関連性 家族心理学研究, *29*, 114-127.
- Minuchin, S. (1974). *Family and Family Therapy*. Cambridge: Harvard University Press, (ミニューチン, S. 山根 常男 (監訳) (1984). 家族と家族療法 誠信出版.

- 森川夏乃 (2016). 青年からみた家庭内の役割と家族機能との関連—役割期待と役割行動に着目して— カウンセリング研究, *49*, 170-179.
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (2021). 家族心理学 家族システムの発達と臨床的援助 第2版 有斐閣ブックス
- 直原康光・安藤智子 (2020). 別居・離婚後の父母葛藤・父母協力と子どもの心理的苦痛, 適応との関連—児童期から思春期に親の別居・離婚を経験した者を対象とした回顧研究— 発達心理学研究, *31*, 12-25.
- 西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの躁鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, *45*, 456-463.
- 野口修司 (2009). 青年期の子ども視点における家族構造と社会的勢力に関する研究 家族心理学研究, *23*, 91-109.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, *44*, 11-22.
- 小田切紀子・菅原ますみ・北村俊則・菅原健介・小泉智恵・八木下暁子 (2003). 夫婦間の愛情関係と夫・妻の抑うつとの関連—縦断研究の結果から 性格心理学研究, *11*, 61-69.
- Olson, D. H., McCubbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M. & Wilson, M. (1985). *Family Inventories*. St. Paul, MN; Family Social Science, University of Minnesota.
- 大山寧寧・野末武義 (2013). 家族レジリエンス測定尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 家族心理学研究, *27*, 57-70.
- 菅原ますみ・八木下暁子・託摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究, *50*, 129-140.
- 鈴山加奈子・徳田智代 (2009). 夫婦関係および家族システムの機能状態が青年期の不安に及ぼす影響 家族心理学研究, *23*, 1-11.
- 宇都宮 博 (1999). 青年がとらえる両親の夫婦関係—親子関係, 家族システムとの関連— 日本家政学会誌, *50*, 455-463.
- Walsh, F. (1998). *Strengthening family resilience*. The Guilford Press.
- Walsh, S., Shulman, S., Bar-On, Z. & Tsur, A. (2006). The role of parentification and family climate in adaptation among immigrant adolescents in Israel. *Journal of Research on Adolescence*, *16*, 321-350.
- 山田智貴 (2022). 「甘え」理論に依拠した親子関係の役割逆転尺度の作成と子どものメンタルヘルスとの関連 家族心理学研究, *35*, 122-136.
- 山田智貴・平石賢二・渡邊賢二 (2015). 大学生における親子関係の役割逆転に関する研究—疑似成熟との関連から— 家族心理学研究, *29*, 1-18.

山田智貴・平石賢二・渡邊賢二 (2016). 大学生における親子関係の役割逆転と特性罪悪感の関連—母親との関係に注目して— 家族心理学研究, *10*, 19-27.

山本倫子・伊藤裕子 (2012). 青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連 家族心理学研究, *26*, 83-94.